



【登場人物】

源氏の君：明石の君からの文
を讀む
明石の姫君：硯を前にする姫君
女童たち：庭で小松引きを
して遊ぶ

【場面解説】

浄土寺藏・源氏物語図扇面貼交屏風の一番手を飾る「初音」の巻。

光源氏の栄華の頂点を極めた六条院で初めて迎える正月の様子が描かれています。新年初めての「子の日」すなわち「初子(はつね)の日」には、長寿を願って、野外に出て若菜を摘んだり、長寿の象徴でこれから成長していく常緑樹の小松を引く遊びが行われていました。満開の梅の香りが極楽浄土を思わせるかのような源氏と紫の上、明石の君が生んだ明石の姫君の住む六条院の「春の町」では、庭で女童たちが小松引きの遊びをしています。

光源氏が、娘の明石の姫君に正月のあいさつに来たところ、六条院の冬の町に住む実母・明石の君から姫君に届けられた心づくしの贈り物や、健やかな成長を祈りいつか再会できる日を願う文を見付けます。未来の国母となる運命付けられた姫として、身分の低い明石の君から引き取り紫の上に養育を任せましたが「母としてどんなに辛かろう」と明石の君を思いやり涙をこらえ「あなたにとって大切な人だから」と、姫君に文のお返事を書くよう促すのでした。

源氏の君を頂点に登場人物がゆったりとした円を描く安定した構図が、まさに源氏にとっての「この世の春」を表現しているようです。

【詞書】

ことばがき

扇面に書かれている文字

年月を

まつにひかれてふる人に
けふうぐひすの
はつねきかせよ

(明石の君から明石の姫君への和歌)

【現代語訳】

あなたが大きくおなりに
なるのを待つことに引か
れて、長い年月を待ち焦
がれながら年を経ている
私に、今日は鶯の初音の
ようなあなたのお便りを
聞かせて下さい。